

第 69 回山口西田讀書會（2015 年 3 月 14 日）

前回（2015 年 3 月 7 日）の Protokol(担当:佐野)

参加者：徳留、植田、竹本、橋本、杉山、桑原、萬納寺、田中、佐野

1. 田中氏 Protokol について

「人心は絶対に快樂に達することはできまいが、ただ勤めて客觀的となり自然と一致するときには無限の幸福を保つことができる」における「自然」とは何か。：「精神」と対置せしめられた限りでの「自然」である。この「客觀的自然」は「物」「理」「性」などとも呼ばれている。我々の「小さき自己」を滅することによって自己は客觀的となり、物、理、性と一つとなることが第二編第九章第六段落により確認された。

2. 田中氏の哲学的な問いについて。

1) 「II 9-4 では、精神の有無を客体の違いから説明している。樹、動物など。しかし問われているのは人間の精神がどの程度発展しているか、ではないか。樹と対話できる人もいる」について：実在の統一作用を精神と呼んでいる。だとすれば無生物から統一作用はあるわけだから、すべての実在に精神があることになる。しかしそれが無生物や植物ではまだ現われていない。植物で（どこからどこまでが一本の樹なのか分からないものもあるし：筆記者）接ぎ木をすると混乱してしまう。動物の場合は、単純なものとはかく、そういう訳にはいかない。この意味で植物には統一力としての精神はまだ曖昧であり、ハッキリと現われているとは言えない。これに対し動物の場合はハッキリと現われていると言える。次に「精神」においてその「統一」が明瞭なる事実として現われる、完全なる実在となり、独立自全の実在となる、と言われる場合の「精神」に何を考えるか。動物の可能性はあるにしても、「精神」はやはり前回その様に解釈したように人間と考えるべきかもしれない（純粹經驗、つまり意識現象について「独立自全の純活動」と言われていた（II 3-1）ことを想起すべきかもしれない）。（問いに帰るならば、精神は基本的にすべての存在に認められている。したがって樹と対話することも可能であり、美術家の如きはそうした精神を感受しうるというのが西田の立場であろう。しかし客体における精神の現われ方に、つまり統一力の現われ方に段階が認められる、というのが、西田がここで言わんとしていることではないか。）

2) 「人心は絶対に快樂に達することはできまい」について：快樂と苦痛は表裏一体だから、苦痛なしの快樂(これを「絶対」といっているのもであろう：筆記者)に到達できない、という

意味であろう。初発の純粹経験にも矛盾(苦痛)と統一(快樂)があり、この緊張と解放の調和が純粹経験自体の快感を形成している。矛盾対立がなければ、意志はこれを統一しようとはしないから意識は消失してしまう。単調なもの、分からないものを聞いていると眠くなるが如くに。これに対し純粹経験を出た有り方が苦痛となる。純粹経験の快とそこから出た苦も切り離すことはできない。我々は気がついたときには純粹経験という有り方を出てしまっているが、その際にこの「小なる自己を以て自己となすとき苦痛多く、自己が大きくなり客觀的自然と一致するにしたがって幸福となる」のである。客觀的自然とは神であり、その一部分としての(真の)自己である。自分(自己)の性に従うとは「個人性」に従うということである。個人性は家族、国家、人類社会と段階をなして進む人格の嚆矢である。読書会では第三編第十二章を参照した。「真に偉人とはその事業の偉大なるがために偉大なるのではなく、強大なる個性を発揮したためである」。しかし同第十三章にあるように、「世人は往々善の本質とその外殻を混ざるから、何か世界的人類的事業でもしなければ最大の善でないように思っている。しかし事業の種類はその人の能力と境遇とによって定まるもので、誰にも同一の事業はできない。しかし我々はいかに事業が異なっても、同一の精神を以て働くことはできる。いかに小さい事業にしても、常に人類一味の愛情より働いている人は、偉大なる人類的人格を実現しつつある人といわねばならぬ」のである。

この個人性について個人性(自分の性)に従わない者はあるのか、という質問が出た。参加者の多くは従わない者はいる、通常従っていない、という意見に賛成していた。しかしこの問題は難しいのではないかとということで先送りされた。(追記：我々の意識の構造からすれば、我々は自己の本性を知ることにはできない。我々はそのつど自分がしたいことを定め、行為するしかない。その意味では真の自己(自分の性)に従ってはいないし、そもそも従うことはできない。しかし我々は意識以前にすでに生きている(はずである)。その世界において我々はすでに自分の性に従って生きている(はずである)。その意味では個人性に従わない者はいない(はずである)。しかし我々はその「性」が何であるか分からないし、すでに自分の性に従っている、と言われてもその意味が分からないし、分かったとすればいかがわしいもの、危ういものになる。人間はこうした矛盾の内を生きているように思われる。)

また第二編第九章第六段落末尾の「我なきもの即ち自己を滅せる者は最も偉大なる者である」について、これは「小さき自己」ないし「偽我」を滅却した状態であり、第三編では「至誠」として扱われていることが指摘されるとともに、一体自分が偽我を滅したことをどのようにして知り得るか、それは単なる思い込みではないか、が問題とされた。そのような思い込みには危うさがあり、弟子の田辺先生が「決死」を説いて学生を戦地に赴かせたこと、知覧の特攻記念館に「絶対無」と書かれた遺品があることなどが紹介された。

京都学派のこうした問題は極めて重要であることが参加者より指摘された。(追記：我々は一面において真の自己にまっすぐに通じている。それ故芸術道徳宗教の極致にまっすぐ通じており、我々の中の数少ない天才の業績も可能となるし、我々はそうした天才の業績に与ることができる。もっと言えば、我々はすでにこうした世界に生きている。しかし他面において我々が本質的に意識的存在である以上、我々には真の自己の領域は完全に閉ざされている。したがって我々は偽我を生きるほかはない。その点からすれば、自分が真の自己、アリノママの自己であるなどと言うのはすでに偽我に落ちていると言える。ここでも我々は絶対に矛盾した有り方の中にある。)

### 3. テキスト講読(第三編第九章第四段落注の2から第五段途中まで)

1)注の2について。「隠れたる本質とは何か」という問いに対して：本質とは「精神」であり、統一作用のことであることが確認された。その「本質」ないし「根本的性質」である統一作用が内へと発展していくこと(内展 *involution*)が、統一作用が外へ現われること(外展 *evolution* =進化)である。「内容が多様なればなるほど一方において大なる統一を要する(IV1-4)」のである。なおこの内展と外展の思想がライプニッツには直接見いだされなことが岩波版、講談社版の注釈を通じて確認された。この言葉はヘーゲル『大論理学』からのものではないかとの可能性が佐野より示唆された。

#### 2)第五段落について。

- ・「一派の心理学」とは「主知説の心理学」であることが第二編第三章第二段落を参照しつつ確認された。
- ・「観念感情も、これをして具体的实在たらしむるのは統一的自己の力による」について。「ある言葉(観念)」を聞いたとき、人間は自分の過去の記憶等を総動員してこれに当たる。そこに含蓄的な包括者(全体)が現われ、両者を統一してこの言葉は「自分の知っているこの言葉である」という無意識的な判断を行う。こうして一般的な「ある言葉」は「自分の言葉」として個別化されて、自己の理解に落とし込まれ、自分の人生観のなかに取り込まれる。これが「具体的实在」になることだと説明された。「ある感情」の場合も同様である。この感情に自分の言葉を与えることができないと精神的に大きな負担となるとも言われた。